



「日本留学アワーズ 2013」結果概要

平成 25 年日振協日本語学校教育研究大会実行委員会主催

進学先アンケート調査チーム報告

2013 年 8 月 25 日

1 趣旨および今年を取組：

日本語学校が留学生に勧めたい進学先を選び投票するという試みを始めて、今年で2年目となる。本賞の趣旨は、私たち日本語学校が外国人留学生に勧めたい大学・専門学校等の進学先の留学生受入校としての像を明らかにし共有することであり、これにより、日本語学校と進学先のつながりを深めることを目指すものである。

日本語学校の留学生受入れに対する思いは、海外に直接出向くところから、入学～卒業まで親代わりのようにしてサポートする里親的なものであり、進学後の彼らの成功を願う気持ちは共通している。今年、賞の名称を「日本留学アワーズ」と改めたが、この名称にはこうした日本語学校の思いが日本留学のビジョンにつながるよう願いが込められている。

また新たな取組として、専門学校、大学文科系および大学理工系の3つ部門を、今年から大学院を加えた4部門とし、さらに課題であった東西のトップ校（部門賞）選出を行った。これにより、上位ノミネート校だけで昨年の2倍の31校となり、その中から各部門東西1校ずつ計8校をトップ校として選出した。

なお、東西の分別に関しては、東日本および西日本それぞれに位置する日本語学校が投票した学校、という仕分けとした。

2 実施方法：

ウェブアンケート回答形式による投票。各校がカテゴリ毎に5票を上限として「学生に勧めたいかどうか」という視点において投票。責任を持った投票を促すために、学校名と投票者を明らかにし、投票理由も明記することを条件に入れた。

送付日本語学校数：395校（1975票）

回答校数：114校（269票うち有効票241票）

回答率：28.9%（票数では13.6%）

3 受賞校：

<専門学校部門賞受賞校★および上位入賞校>

東日本：日本電子専門学校★ 西日本：大阪コミュニケーションアート専門学校★

ICS カレッジオブアーツ

ECC 国際外語専門学校

東京国際ビジネスカレッジ

ヒコ・みづのジュエリーカレッジ

文化服装学院

ホスピタリティツーリズム専門学校

<大学（文科系）部門賞受賞校★および上位入賞校>

東日本：明治大学★ 西日本：立命館大学★

聖学院大学

日本大学

早稲田大学

愛知大学

関西学院大学

四日市大学

<大学（理工系）部門賞受賞校★および上位入賞校>

東日本：東京電機大学★ 西日本：名古屋工業大学★

足利工業大学

東京工業大学

東京都市大学

大阪大学

福井工業大学

立命館大学

<大学院部門賞上位入賞校>

東日本：早稲田大学大学院★ 西日本：関西大学大学院★

大阪市立大学大学院

神戸大学大学院

一橋大学大学院

武蔵野大学大学院

明治大学大学院

4 結果考察：

◆投票状況

結果を概観すると、投票率の高いのが大学文科系（423票）、つぎに専門学校（406票）、そして大学理工系（348票）、大学院（240票）となっている。昨年は専門学校の投票率が一番高かったのに対し、今回は大学文科系への投票が専門学校を上回った点が注目される。

投票率は10%から13.6%に若干の伸びは見られたものの、全体的には昨年並みにとどまり、絶対数としてまだまだ満足できるレベルではない。首都圏以外の日本語学校に投票に関心を持ってもらうことが、その解決策となると思われるが、そのためにも今年は東西地域に分けて表彰することにこだわった。やはり、全国の日本語学校が参加してこそ、賞の価値も高まる。来年度以降、さらに参加校が増えることを期待したい。

◆結果について

受賞校の傾向を見渡すと、一言で言えば「偏差値<留学生サポート」であり、これが<日本留学アワーズらしさ>であると言っていいだろう。

評価が集まった学校は、偏差値や知名度に偏っていない。入学後の学生の評判に加え、留学生受入対応や入試関連の情報発信がしっかりなされている等、日本語学校からの送り出しがスムーズで、なおかつ入学後もサポートが安心して進学させられる、という点が特に評価されている。

選ばれた学校を見ると、今年初めてであるにも関わらず、西日本地区選出の顔ぶれに昨年の受賞校構成と重なる点が多いことに気づく。トップ校には、留学生受入れに以前より熱心に取り組んで来た大学が並ぶ一方、都市部から離れた大学が、文科系大学では東の聖学院に対して西の四日市大学、理工系大学では東の足利工業大学に対して西の福井工業大学と、まるで東西が呼応するかのような結果になったことは興味深い。

また、東日本について言えば、ほとんどの学校が昨年に続いてノミネートされ、しかもトップ校3校（日本電子専門学校、東京電機大学、明治大学）全てが2年連続受賞となった。これは、こうした賞で名前が挙がるのが定評に結びついていくという見方もあるだろうが、むしろこれまでに築いた日本語学校との信頼関係の結果と言った方が適切だろう。

今年新たに加えたカテゴリーである大学院に関しては、日本語学校から大学院への進学は増加傾向にあるとはいえ、他の進学先に比べるとまだ少ない。また、大学院の場合、大学単位というより、研究科や専攻、研究室への評価であるところが難しい点でもある。投票の際は研究科や専攻まで記入してもらう方式をとったが、やはりばらつきが大きくなったため、結果に反映させることができなかった。しかし、何と云っても留学生向けの大学院情報が少な

いため、他校の評価結果は日本語学校の進学相談の現場にとっての貴重な参考資料となりそうである。

◆受賞理由について

上位校に共通しているのは、すでに結果の考察でも述べた通り、有名校か否かに関わらず、留学生受入れのサポート体制が充実していると同時に教育の質を落とさず確保している点である。また、日本語学校とのコミュニケーションをできるだけ密にしているところもカテゴリーを超えて共通している。他

専門学校：内容、就職率、に加え、設備の良さも重要なファクターである。その他、出席、成績、課題等の厳しさが評価され支持が集まった学校がいくつかあった。また、入学前後にその専門性が留学生個人に合うか、日本人に混じって授業についていけるかどうか、目配りがされ、ケアがしっかりしている点が目立った。それらがあるからこそ、専門教育も充実している学校が支持を集めていたのであろう。

大学：留学生受入体制と教育の質が評価の中心にあると言える。また、出口すなわち就職のサポートが評価されている学校も多い。教育の質の部分では、学生のニーズに合うさまざまな学問分野があることももちろん、その学校ならではのユニークな学科が評価されている場合もある。つまり、教育理念をしっかりとっていて、さらにその中で留学生に対してもサポートを行いつつその教育理念のもとに教育を行うことが、日本語学校に評価されているようである。

大学院：特に入試前の対応が大きな評価ポイントになった。受験前に教授が相談に応じるかどうか、研究生になった場合、修士になるまでのケアがあるのか、などである。また、もちろん入学後の教授の指導も評価のポイントになる。やはり、評価がどうしても教授の個性に負うところが大きくなるだろう。

要望にもあるが、日本語学校とのコミュニケーションも前回同様重要な評価ポイントになっている。進学した学生の報告だけでなく、説明会の分かりやすさ、さらには日本語学校との連携に言及する評価もあった。また、留学相談会や日本語学校を定期的に回り情報発信をしっかり行っていることなど、留学生募集に積極的であるということが、現場の担当者に好印象として映っていることがわかる。

●学生募集・入試など

模擬試験や学校行事などを日本語学校にオープンにする／担当者がこまめに来てくれる／体験授業に参加してもらってから出願の手続の相談をする／入試の書類作成

からケアを行う／説明会での説明が分かりやすい／留学生の受入れに関して日本語学校との連携を積極的に試みている／受験機会が複数回ある／入学前にレポートを提出させるなど、合格後の学生のケアを考えている／など

● 入学後のサポート

就職率が高い／学生の学力が伸びるよう様々な指導を行っている／奨学金がある／進学した学生について定期的に報告がある／留学生の支援体制が整っている／など

● 教育の質

いろいろな専門コースが充実している／カリキュラムがしっかりしている／ユニークな専門／学部の特徴や理念が明確／魅力ある研究がなされている／アジアの技術者を育てようとしている／教育水準が高い／など

● 学習環境、評判等

規模が大きく、施設が新しい／学生たちの評判がよい／知名度が高い／日本人との触れ合いがある／など

◆要望まとめ

要望、意見は86件寄せられた。大まかに分類すると、約半数が進学先一般（大学・専門学校など特定していない）に対する要望（43件）、大学に対する要望（24件）、大学院に対する要望（8件）、専門学校への要望（1件）、アンケート実施者への要望・意見（10件）となった。

進学先一般に対する要望として、わかりやすく丁寧な情報提供（最近是非漢字圏出身者が増えているため、募集要項の読みにくさをルビふりなどで解消してほしいという声も）、合格基準を明示してほしい（基準があいまいなのではないか、必要な日本語力がどの程度なのか can-do statement など明示してほしいなど）、進学後の様子を教えてほしい、就職サポートをしっかり行ってほしい、という声が多く寄せられた。

中には、合格した学生に対して、（卒業前に）日本語学校を退学し、進学先の大学や専門学校で新たに在留資格を申請してあげる、という学校の存在が指摘されている。そうすれば合格後、日本語学校に残った在籍期間分の学費を払わなくて済むだろう、という「親切心」と思われるが、これでは日本語学校との信頼関係は構築できない。合格後こそ、進学後の日本語運用力をつける最大の機会であることを、大学や専門学校の担当者に認識していただきたい。同様の意識の問題として、説明会時に日本語学校での日本語学習や出席率の重要性を強調してほしいという声も寄せられている。また、ドロップアウトを心配し、入学後の出席状況等の情報提供や、学生への目配りなどを求める声も散見された。

大学に対する要望では、特に合格後の出席率やケアと、保証人の問題についての意見が目立った。早く合格が決まった学生の中には、モチベーションが下がり出席率が落ちる学生がいるため、大学側でもその期間の出席率を重視してほしいという意見や、入学時に求める保証人が見つからない、不要、あるいは母国の保護者にしてほしい、という意見が寄せられた。また、短期大学や3年制大学卒業生のための学部／大学院進学を制度を整えてほしいという声も数件見られた。科目履修制度を柔軟に運用してはどうか、という提案も添えられている。さらに、TOEFL 試験について、学生への負担が大きく、改善を求める声も出されていた。

大学院に対する要望には、全般に受入体制の明確化、整備などを求める声が目立った。中には、教授と大学事務局との食い違いやずれ、などの指摘もあった。

専門学校については、日本語力のない学生を簡単に合格させないでほしいという要望が寄せられている。

最後に、進学先アンケート実施者への要望や意見だが、学生に勧めたい学校を選ぶことはできない、あるいはこうした評価により学生の受験に影響が及ぶのに賛成できない、というマイナスの意見が寄せられた一方、こうした情報は特に離れた地域への進学を希望する学生への対応の参考になる、という意見や、関西地域のデータがほしい、という要望などもあり、一回目の時に比べると、日本語学校の担当者の理解に変化が現れたことがうかがえる。

5 今後に向けて

2回目の実施となった今回は、昨年より準備は早めに開始したにもかかわらず、投票数や集計結果の公表日などの目標値は達成できなかった。原因は投票数を増やすためにギリギリまで集計が始められなかったことにある。せっかく東西に分けたものを、来年は維持し、さらに内容を充実させていくためには、投票者である日本語学校への理解協力を求めることが必要である。次回は投票数が伸びるための周知や方法の工夫をして、今の2倍以上の票数を目指したい。

しかしながら、西日本地区の受賞校全て授賞式に出席していただけたことは望外の喜びであり、次年度の実施に向けてさらに周知活動を効果的に行い、理解を広げようという気持ちを新たにしたい。